

話題38 母の日に「心と体の健康」を考える

～母親は教育の柱～

母親の若かりし頃の写真が手元にある。自分が亡くなった際の、仏壇に飾る写真にするようにと預かった1枚である。

田舎の実家の仏壇には親父と母親の遺影が飾られている。親父は警察官であったが、40歳の若さで殉職した。若い親父の遺影と100歳で天に帰った母親の写真が並んである。身内の者にとっては何も違和感を感じない。しかし、母親は気にしていた。若い親父の遺影と不釣り合いなので、若かりし頃の自分の写真を託けたのです。母親でありながらも、一人の女性としての繊細な思いがあった。

私が3歳、妹が生まれた年の親父の死である。青天の霹靂。5人の子供を目の前にした母親の心境は推し量ることができない。多分に「茫然」とした空間の中にも、「自失」は無かったのではないかと考えたい。悩む暇（いとま）がなかったとでも表現できる。

「お母さんは、お腹がいっぱい」。食事のたびにでる母親の口癖である。朝夕の食事は、一家団欒、皆がそろっての食事の風景があった。思い出してみると、子供たちに「お腹いっぱい」の食事をとらせて、残れば食べる母親の思いがあったものと思われる。

「母親は寝ない」ものだと思っていたという兄弟の母親像がある。確かに、母親の寝ている姿を目にした記憶がない。子供たちを寝かしつけてから、ひとりの時間をかみしめていたのかもしれない。朝、目が覚めたときには、すでに食卓には朝食の準備が整っていた。

戦後の混乱期。おやつといってもお菓子の類（たぐい）があったわけではない。近所の小さな製糖工場から手に入れた、商品にはならない黒砂糖のかけらが格好のおやつであった。衛生状態も、現在とは比べることができない時代であった。この黒砂糖のかけらも、決まって火にあぶってから子供たちへ手渡された。加熱による殺菌消毒である。

天気の良い日は、庭には布団や毛布、寝具のたぐいがいつも南国の太陽の光を浴びていた。洗濯機は無く、すべてが手洗いの時代であった。日光消毒による衛生管理であった。

洗濯機、掃除機、炊飯器、食器洗浄機、冷暖房装置等々、便利な機器が氾濫し、「もの」は確かに豊かになった。果たして、「心」の豊かな時代にもなったであろうか。

一家団欒の食事は、大切な教育である。そして、母親のちょっとした心遣いが家族の健康管理につながり、病気とは無縁の生活を演出することができることを母親は教えてくれた。心と体のバランスを考えて。

世代の違いを意識しつつも、若い世代の母親に語る団塊の世代のつづきである。

今日は、母の日。

2015・5・10